

通釈

- ・天は長く寒さが続くと 万物が凋みなえることを憐れんぞか
- ・晩冬十二月十九日に はやばやと立春を迎えたことだ
- ・水かさの浅い川・深い川 いずれもが（立春を迎えて）いつまでも氷で結び閉ざしているところがあるのか。（あるはずがない）
- ・高い山・低い山 いずれもが（立春を迎えて）いつまでも雪を残しているところがあるのか。（あるはずがない）
- ・（ところが、いくら立春を迎えたと言っても）根がなければ樹は 花咲く願ひも断たれてしまう
- ・（いくら春を迎えたところで）骨を痛めた魚は 浪間を泳ぐことは出来ないの、氷がとけて春を迎えた浪の喜びに照応することは出来ない
- ・「延喜」と改名されて 新しい時代の到来したことに 私は全てを託し、
- ・東北に頭を向けて はるか京都の空を想い、同じ夜空に宿す、この北斗七星に心をこめて祈ったことが、いつたい何になろう。（現実には、私の望みがすべて断たれているというのに）

語釈

題元年立春：延喜元年（九〇一）十二月十九日の事を指す。年内に立春を迎えたのである。「年内立春」については、柳澤良一氏の詳細な説明がある。（注3）

1 愍：あわれむ。憫。関。うれえたむ。

凋：しぼむ。なえる。草木がしおれる。木の葉が黄ばむ。おとろえて色が変わる。